

ロバート・オウエンとニュー・

ハーモニーに関する研究（博士論文要旨）

上 田 千 秋

はじめに

一九六三年の夏の夕、私はサンフランシスコのマーケット・ストリートのある書店に入って、偶然、ノイズの『アメリカ社会主義史』の分厚い復刻本を見つけた。本のカバーには次のように書かれてあった。

「オウエンのニュー・ハーモニー、チャニングのブルック・ファーム、それにオニダ共同体——約百ヶ所の宗教的、非宗教的社会共同体の文書と実地報告」『アメリカ社会・経済史の原典』稀観書一八七〇年版の復刻」

しかも限定五百部とあったため、鬼の首でも取ったかのような興奮を覚えて購入したのである。これが私のオウエン研究のスタートであった。

ノイズの作品を通じて、オウエンのニュー・ハーモニーにおける実験に関心を持った私は、彼の『自叙伝』や『新社会観』の訳本を読み始めた。丁度その頃から英米のオウエン研究が再び活発化し、オウエン自身の著作や、今世紀初頭までのオウエン研究文献の復刻本がどんどん出揃うようになった。

わが国というよりは世界的なオウエン研究の権威である五島茂の『オウエン著作史』が復刻された一九七四年

以後は、この大著を足がかりに、ニュー・ハーモニイに焦点をあてて海外文献を読みあさるようになった。

特にロックウッドの『ニュー・ハーモニイ運動』（一九〇五年）と、ベスターの『辺境のユートピア』（一九五〇）を読んで、私なりに、ニュー・ハーモニイの実験に関する研究をまとめてみたいと考えるようになった。

浅学の私のこの考えを認めて、ニュー・ハーモニイに関する研究書が未だこの国に存在しないこと、しかも戦前の優れた社会科学者は、一様にニュー・ハーモニイに注目していたことなどを教えて下さり、研究の継続を積極的に奨めて下さったのは、私の二〇代からの恩師、孝橋正一教授である。

もちろん非力の私には、オウエンの波乱に満ちた八七年の生涯を丹念に追跡して自信を持って語る資格がない。せめて彼の生涯の山場の一つであるニュー・ハーモニイの活動を克明に追ってみて、オウエン思想の一端を覗こうと試みたのが本論文である。

恩師に従って社会福祉の学問研究の世界を彷徨し続けている私は、この頃になってオウエンの説いた共同体社会主義が、これからの社会福祉の原点になるのではないかと思うようになっていく。最大多数の最大幸福の理想は、オウエンが考え、実験したような共同体が、階級、民族、国境の壁を越えて普及しなければ実現しないのではないかと考えている。私のこのユートピア観は間違っているであらうか？

「ロバート・オウエンの性格・思想形成と彼における共同体社会の理念・構想ならびにその実験の経過に関する研究」とでも題すべき本論文は、これを四編に分け、第一編は、序説として、オウエンの家系、宗教的性格の形成、オウエン思想におけるルソーとベンサムの影響を検討している。第二編は、オウエンの実験の舞台となった宗教共同体ハーモニイの歴史及びその指導者ラップの教説に触れた上で、オウエン自身の共同体の理念と構想を、その主著である『新社会観』及び『ラナーク州への報告』を通じて考察している。第三編は、一九二四年秋から一九二七

年春ごろまでのオウエンの行動を追跡して、彼のアメリカ遊説の影響、ハーモニ購入の経緯、共同体準備社会の活動、平等共同体へ移行後の実験経過を分析している。第四編は本論文の結びとして、共同体実験の評価、オウエンがアメリカに残した子供達と、共同実験者であったマクルアのその後の業績を紹介した上で、オウエンの共同体社会主義が、現代の社会変革思想として評価されるべき必要性を論じて終りとしている。

以下は各編別の内容要旨である。

第一編 序 説

第一章においては、これまでのオウエン研究では空白になっていた彼の家系を検討することの必要をとり上げた。従来の研究における家系に対する無頓着な態度を、彼の「環境説」に帰因すると考えるならば、むしろ人格形成における環境の影響を重視し続けた彼の性格形成における先天的な影響を考慮した上で、その後の彼に及ぼす環境の影響を考えるのが筋道ではないか、またオウエン自身が、自分の家系については意識的に語るのを避けているふしが見られるが、その理由を彼の「環境説」に帰してしまうのでは、いつまでもオウエンの謎が温存されると考え、少なくとも彼は下層社会の出身ではなく、その家系はウエイルズの名門につながる点を一応論証した。

さらにオウエンは幼少より極めて宗教的性格が強かったことについては、彼自身も告白しているとおりであるが、彼の宗教的人格を考える場合、或いはその生活信条ないし思想的基盤を考える上で、幼時に受容したメソジスト的性格が濃厚であること、オウエンの宗教的人格の成熟化に最も寄与した宗教信条がメソジズムであること、オウエンの後半生がジョン・ウエズリー（一七〇三―一七九一）の性格的特徴や行動特性と極めて類似する点を挙げて、オウエンの千年王国論を理解する上でも、彼におけるメソジスト的性格を把握する必要があることを強調した。

第二章は、オウエンの主著の一つである『新社会観』を構成する四つの小論文がこれまで、彼の独自の性格形成論であり、教育論であり、漸進的社会改革論とみられていた点を紹介した上で、私はオウエンの福祉思想がこの小著に凝縮されていると見た。とりわけ第一論文は、悲惨な社会の現実認識の上に立って、その現実を克服し、社会調和を導く唯一の認識の原理であり、社会福祉の実践のためのエトスとなり得るとみたのである。オウエンは、人間の本性は、創造主（神）の業によって形成され、自己の幸福を得たいとする願望と自己保存の欲求とを荷つてこの世に登場してくると説いている。この天性を個性に応じて発展させるべきであるとする自然主義が、彼の教育論、政治論、福祉論を基礎づけるものと考えられるが、彼によるこの自然の法は、しばしばルソーの影響を受けたものと見られている。

私も、従来の研究に与してオウエンの性善説に感化を与えたのが、ルソーの『人間不平等起源論』とみるのにやぶさかではないが、オウエンがルソーの作品を熟読したとは到底考えられない以上、友人のジェームス・ミル（一七七三―一八三六）を通じてルソーの思想を学んだのではないかという感触を得た。

また、一般に「ベンサム信条がオウエンの前提である」（マックス・ベア）と見られている以上、ベンサムの「功利性の原理」が、オウエンの思想形成に及ぼした影響も考えてみた。だが唯物論的無神論者であったベンサムとルソーの理論が中心となってオウエン思想が形成されたのではなく、彼をとり巻いた思想的醗酵の時代に、英国に移植された啓蒙哲学思想を含む幾多の著作の濫読から、断片的に拾得した知識を、独自の宗教的性格と融合させたものがオウエン思想となったと考えるに至ったのである。

第一章においては、まず、わが国においてニュー・ハーモニイに焦点をあてた研究が進まなかったのは、(1)ニュー・ハーモニイだけでなく、あらゆるオウエン主義の実験は、最初から「ユートピアになる運命」を荷った「失敗するに決っている小規模な実験」に過ぎぬと軽視したマルクス、エンゲルスの主張を重視したこと。(2)わが国のオウエン研究に影響を与えたマックス・ベア(一八六四―一九四〇)が、一八二一年以後のオウエンの活動を高く評価しなかったこと。(3)海外、とくにアメリカにおけるニュー・ハーモニイ研究が再び活発化したのは極く最近であることの三点が影響したものと考えられる。

だが、マルクス達が否定したユートピア思想は決して過去の思想ではなく、歴史形成の主體的起動力として再びよみがえらせ、再建のユートピアに科学的現実認識の浸透の不可欠性を認めた上で、トータルな人類の福祉を模索する場合には、ニュー・ハーモニイの研究がやはり必要となる点を力説した。

次いで、カンター並びにリグビーに従って、現代のコミュニケーション運動に触れ、特にアメリカの若い世代の間にオウエンへの関心が高まりつつあることを紹介した。

ところでニュー・ハーモニイの研究に際しては、その舞台装置となったラップ教徒のハーモニイ共同体の概要と、その創設者ジョージ・ラップ(一七五七―一八四七)の独創的な教説を理解しておくことが前提条件となるため、一八〇五年から一八二四年までのハーモニイの前半の歴史と、ドイツ敬虔派が分離主義者として、宗教二界の迫害を受け、アメリカに渡り、禁欲の強化と、職業労働への誠実と、一切の物的手段の共有を足がかりに独自の教団を形成するに至るまでのラップの教祖的役割りについて分析した。

第二章は、ニュー・ハーモニイのデザインと題しているが、まず、ラップの意志を受けてハーモニイの資産の売却のためオウエンに接触したりチャード・フラワーという人物についての従来の説明が誤っていること、彼が奴隷

制即時廢止論者であり、共同体主義者であったことを考証した上で、オウエンの渡米の動機が、フラワーの仲介、新大陸への憧れだけではなく、当時のニュー・ラナーク工場における経営上の困難にもその理由を求めることができる点について、ジョン・バットの最近の研究を根拠にして考察してみた。

次いで、オウエンの共同体設置構想は、彼の『新社会観』から、『製造業に従事する労働貧民の救済のための調査委員会への報告』そして『ラナーク州への報告』と連なる一八一三年より一八二〇年までの間に、ほぼ完成されたものとみて、一連の著作に盛られた独自の理論と提案を検討した。

特に、『新社会観』における彼の主張には明らかに社会改良家、経済学者バトリック・カフーン（一七四五―一八二〇）の影響が濃厚である点を初めて論証したが、もっとも、国家社会の維持・発展のためには大量の労働者が一定水準の貧民状態におかれる必要があると考えていたカフーンの基本主張には与しなかった点は留意しておいた。また、一般に『新社会観』をオウエンの近代社会主義の出発点と見なす研究が多いが、私はこれに同調せず、この段階での彼の提案は、「現存制度の過誤との妥協」でしかなく、従って、『新社会観』には共同体の理念と構想が見られないが、彼が説いた「性格形成論」に基く、「新社会観」が、彼によって資本主義浄化の思想から、資本主義否定の思想に転化する契機は何であったのか、或いはその後の彼の新社会制度を基底的に支える「新社会観」は、資本主義変革の理念を当初から内包していたと考えて良いかといった疑問には明確には答えられなかった。

『新社会観』では、失業問題の解決策として政府直営の公共事業の実施を提案するにとどまっていたオウエンは、ナポレオン戦争終結後は失業対策としてのコロニーを構想し、さらにコロニー構想と性格形成原理を基軸として未来社会像を描くに至る。次いで工場法制定促進運動を経て、コールの云う如く、「彼の社会主義的協同主義の理論の萌芽をなす」共同体計画へと転化していくのである。死を賭したラダイツが復活し、コベット達の議会改革要求

が高まり、ペイン主義者の大衆示威運動が活発化する中で、オウエンは、彼自身の共同体社会主義体系の完成を示す『ラナーク州への報告』を書き上げるのであるが、その間にも独自の社会改良ないしは改革のための提案を盛り込んだ著作類二五点を公けにしている。これらを検討した上での内外のオウエン研究者のほぼ共通する解釈は、(1)一八一五年をオウエンの生涯の転換期とみる。(2)その上で一八一七年の『救貧委員会報告』を機として彼が社会主義者に転身したとみる。その帰結として、(3)一八二〇年の『ラナーク州への報告』をもって、オウエン思想体系の完成を示すものとみるという理解である。だが、私はこれらの文献を通じて、社会主義者としてのオウエンの誕生は一八一七年ではなく、すくなくとも一年以上前であると受けとめるようになったが、温情主義を徹底することによって遂に一個の社会主義者となったオウエンの場合には、何年からとか、何が具体的契機となったかを詮索すること自体、余り重要な意義を持たないのではないかと考え、その理由を展開しておいた。

オウエンの共同体設計図は、『ラナーク州への報告』第三部でその細目が明らかにされており、その計画が、労働と消費、財産の共有と権利の平等といった原則を基礎とする限り、当時存在したアメリカの諸共同体と類似点があると彼が述べている点に注目して、項目別に内容を検討した。

オウエンが、自己の「性格形成原理」に基く「新しい村」を世界中に普及させる以外に「約束の時代、獅子が小羊とねそべる時代、永遠の平和が世界中にゆきわたる時代」は実現しないと確信を持つようになったのは一八一六年元旦のことであり、彼が、ニュー・ハーモニーにおいて準備社会の発足を告げたのは一八二五年四月末である。つまりオウエンは、共同体の実験に先立つ十年間を、その計画立案のために費したのであった。

第三編 ニュー・ハーモニーにおける共同体実験に関する研究

わが国におけるオウエン研究はこの十年間に再び活気を呈するようになり、「他国の沈滞を考えると、日本は今や世界で最も盛んな国だ」（白井厚）と云われている。だが、ニュー・ハーモニイに焦点をあてた詳細な研究は未だ生れていないし、世界的にみても、ニュー・ハーモニイ活動に関する代表的研究書は、はじめに挙げたロックウッドとベスターによる二冊のみである。そこで本編は、この二冊を土台にして、関連資料による補正を加えつつ、一八二四年秋のオウエンの渡米から、一八二七年春の帰英に至る彼の動静を中心に、共同体実験の経過を克明に追跡することに努めた。

第一章は、一八二四年一月四日、ニューヨークに上陸してより、一二月一六日、インディアナのハーモニイに到着するまでのオウエンの各都市遊説と、知識人、財界人、政治家との接触状況を見た上で、ハーモニイの土地と建物その他の購入をめぐる経緯を考察している。

従来の内外の研究では、オウエンがハーモニイの購入のために一五万ドル（又は三万ポンド）を支払ったとする説が支配的であったが、実際に彼がラップに支払ったのは九万五千ドル（一九、四五一ポンド）であったことを立証し得た。

ハーモニイの購入手続を終えたオウエンは、一八二五年二月二五日と三月七日の二回にわたって、ワシントンの下院議場で、大統領、各省長官、国會議員等を対象に「新社会制度に関する講演」を行なっている。第一回目の講演は、性格形成論に基づく環境の原理を述べたものであり、第二回目の講演では、自己の共同体計画が、合理的な新社会制度の基幹となる点を説明し、ハーモニイにおいて着手する実験への協力を要請したのであった。特に第二回目の講演内容は、ニュー・ハーモニイの最終的な実験計画書ともみられる重要な資料でありながら、わが国には未だ紹介されていないため、その全文を翻訳して、資料として本論文に添付しておいた。

また、実験の成功を確信していたオウエンの主張に対する、ジェファーソンやマジソン等の反応もながめておいた。

第二章は、一八二五年四月二七日のニュー・ハーモニー準備社会の開設宣言以降九カ月間のいわゆる仲宿の時期の状況を追跡している。特に準備社会の規約三九項目を検討し、具体的な生産計画の提示がなかったこと、所有関係の曖昧な態度、クレジット制度の導入による収支計算の複雑さを指摘した上で、準備社会当時の生産活動を前住者ラピストの場合と対比させて分析すると共に、全般に調和を欠いた社会生活の実態を描写している。

なお、従来のニュー・ハーモニー研究では、実質的な共同実験者であったウィリアム・マクルア（一七六三—一八四〇）の役割と、マクルアが引率した知識人集団の影響が無視又は軽視されているため、本章の最後に、これら主要人物の経歴や、オウエンとの関係を紹介しておいた。

第三章は、一八二六年二月の平等共同体の成立より、翌年五月末の共同体の終末に至る一五カ月間の、内部分裂と混乱の状況、オウエンの独裁的改革策の失敗などを考察している。

特に本章ではオウエンがフエレンベルグの教育方式を支持したに対し、マクルアがベスタロッチ主義に傾倒していた点を取り上げ、両者の教育観、世界観の相違が確執を生み、共同体の運営に影響を及ぼしたこと、知識人集団と一般住民との不対立、共同体の所有権の帰属をめぐる混乱、平等共同体よりギルド的組合社会への移行経過などについて考察を加えた外、オウエンが起死回生策として発表した「精神的独立宣言」（一八二六年七月四日）の内容を分析し、彼の千年王国論者的発言に留意した。この「宣言」も、わが国では紹介されていないため、全文を訳して資料として本論文に添付しておいた。

第四編 結 び

本篇を三章に分け、共同体実験の評価、ニュー・ハーモニーの後継者、オウエン主義と現代に関して論述している。

第一章では、十年にわたって構想を温め、成功を確信して、巨費を投じて行なった実験が、かくも短期間に失敗したのはなぜかについて、内外の研究者の批判を分析した上で、失敗の真因を、オウエンのアメリカにおける痛烈な既成宗教（キリスト教）批判、特に『聖書』の公然否定に求め、トクヴィルにならって、オウエンが、当時のアメリカ社会における「宗教の精神」と「自由の精神」の、他国にみられぬ（民主主義的）結合に気付かなかった点を指摘した。

もっとも当のオウエンにとっては、この実験は失敗ではなく、これによって貴重な経験と教訓を得たことを本人自身が意識しており、晩年には、『聖書』の一部を真理として認めるに至る点にも留意しておいた。

第二章では、オウエンの子供（男四人、女一人）が、すべてアメリカに帰化し、ニュー・ハーモニーを拠点として、この国の文化と民主主義の発展に寄与した事実が、わが国では知られていないため、個別的にその業績を紹介すると共に、共同実験者であったマクルアの、その後のニュー・ハーモニーへの貢献についても触れておいた。

また、ニュー・ハーモニー共同体の実験に要した費用は、オウエンの負担分は計二〇万ドルとなるが、マクルアの援助分を加えると総費用は、すくなくとも約三〇万ドル（約六万ポンド）以上となり、当時のオウエンの全資産額を遙かに超過することを立証しておいた。

第三章は、オウエン主義と現代と題して、まず、社会主義という用語が、オウエン主義による理想社会を説明す

るために生れた言葉である点を確認した後、科学的社会主義の提唱者によって、未熟な観念論として、一顧の価値だにない非科学的妄想として斥けられてきたオウエン主義が、「人間の本性および人間の幸福についての科学である」(ジョン・フィンチ)限り、改めて現代の視点に立った見直しが必要となっていることを力説した。

オウエンは、共同体活動が唯一の社会改革手段であると確信していた。平等と人間愛と道徳心に支えられた共同体の普及活動のみが理想社会実現の道だと考えていた。

オウエンにおける人間的社会主義、国境と民族と階級を越えた共同体社会主義が、今後の社会福祉の原点となるというのが、ニュー・ハーモニイの研究を通じて到達した私の現在の理解である。

私がオウエンとニュー・ハーモニイの研究に着手してから二〇年の歳月が流れた。未だ意に満たぬ論述ではあるが、ここに本論文を作成し終えることができたのは、仏教大学より昭和五七年度に一年間の在宅研修の機会を与えられたおかげによるものである。水谷幸正学長はじめ、全学の構成員に対して、改めて謝意を表する。

追記、本論文は『佛教大学学会の出版助成を得て、『オウエンとニュー・ハーモニイ』と題して、ミネルヴァ書房より五九年二月十五日に刊行された。